

ビザなし交流に参加して～日本固有の領土 国後島～

写真・文 栃木県立小山城南高等学校 須藤 進太郎



①



②



③



④

今夏の7/29～8/1にかけ、独立行政法人 北方領土問題対策協会が実施している北方四島交流教育関係者・青少年合同訪問事業に参加した。今回の国後島訪問は、小中高の教育関係者や生徒ら65名で構成された。訪問時は厚い霧に覆われることもなく、雲が多いものの比較的天候に恵まれた。根室から古釜布ふるかまづぶへは長年使用されてきたチャーター船ロサルゴザに乘船し、4時間ほどで到着した。途中、鯨やイルカに遭遇したが、日本の船が自由に航海できないもどかしさを感じた。入域手続き後、艇を使用し国後島の中心都市である古釜布（写真①）に上陸した。現在、この港はクリル諸島社会経済発展計画のもと、大型船が接岸できる埠頭が建設されている。現在は、サハリンやウラジオストクからの定期便が週2便運航されているが、旅客ターミナルもこの10月から運用されるので今後の動向が注目される。港にはサケ・マス漁などで使用されている小型の船もみられたが、難破船が数多く残されており課題は多い。

上陸後、ただちに滞在の拠点となる友好の家まで乗用車で移動した。ごく一部がアスファルト舗装になっているだけで、舗装されていない道路（写真②）が中心であった。国後島ではアスファルト舗装が珍しいが、着実にアスファルト舗装が進められている。これは、メドベージェフ大統領が訪れたり、ロシア政府からの投資が増額されたりするなど、ロシアの実効支配が強くなっていることを示しているできごとの一つである。

滞在中に气象台、図書館、博物館、保育幼稚園等の施設を

視察した。その一つに古釜布中等学校が含まれていた。国後島の中等学校では11年間学び、そのうち1年生～4年生が低学年、5年生～11年生が高学年に所属することになる。建物の外観はプレハブのようで立派とはいえないが、内装は机や椅子がとても綺麗であった。また、パソコン教室やホワイトボードなども整備されており、学習環境が整ってきているようすが伺えた。学校内には優秀な成績を修めた生徒の顔写真が掲示されていたり、卒業試験の案内が掲示されていたりしていた。教室内（写真③）がきれいに整備されているが、清掃は子どもたちが行うのではなく、専門の業者が実施している。また、教科書は下の学年に引き継ぐということで、書き込みは禁止になっている。

教育関係者との交流では二つのテーマについて話し合った。一つ目は国や地域の学び方である。国後島での郷土教育は3年生から開始し、自然の中で学ぶことを重視している。二つ目は家庭との連携である。国後島ではアルコール中毒になっている保護者など連携が困難な家庭も存在することがわかった。

行政府前にはロシア革命で主導的な役割を果たしたレーニン像（写真④）が建っている。この周辺には、今回の交流イベントで使用された行政府ホールがあったり、複数の商店があったりと古釜布の中心地になっている。各商店は物が充実していたが、移入が多いため価格は高い。しかしながらホームビジットでは大歓迎を受け、豪華な夕食を堪能した。調味料は日本製であった。